山と博物館

第44巻 第9号 1999年9月25日 市立大町山岳博物館

ユーモアと人間愛

金田国武

公募展での受賞作が大へんすばらしいものであっても、同一作者の全く傾向のちがう作品や、力をぬいた売絵に接した時、「一体この作者の芸術感はどうなっているのだろうか…」と思われ、素晴らしい受賞作も急に色あせてしまうことがある。その点羽田智千代さんの作品は、どんな小品でも時空をこえた鮮血が正確に脈打ち、一貫して全人格がキラキラ輝いている。

羽田さんは「大町みずえ会」で四十年以上子供たちの絵や版画をみてきたが、「教えることより教えられることの方が多いですよ。」とはにかみながら言う。ある時期、子供たちの絵の素晴らしさに自信を無くし、数年絵筆を断ったこともあったという。

またその時分郡外の小学校でよその組の美術の時間を受持っていたが、ある時子供たちにつくらせた花瓶のなかで、ゆがんではいても個性的な作品を「大へんよくできた」とほめてやったそうですが、次週その教室へ行ってみると、その作品がどこにも無い。不思議に思って聞いてみると、担任の先生が、「こんなにゆがんでいては、みっともないぞー」と作り直させたという。この考えのちがいのなかに、羽田芸術の真髄がひそんでいるのではなかろうか。

羽田さんは昭和四十年代からモノクロ版画の単純幽遠な美にひかれ、墨一色で心象風景を追求し続けてきたが、地域活動にも積極的な羽田さんだから、その目は自ずと社会現象へ向き、公害や営利主義の渦巻く世紀末のなかから、芸術的アイロニーを通して、二十一世紀へ明るい橋渡しをしようとする。

鳥や虫の視点からユーモアをもって表現しているのは、版画家羽田智千代さんのあたたかい人間愛のあらわれにほかならない。

（きんた くにたけ・日本現代詩人会会員）

忘れてなるものか 羽田智千代

企画展

羽田智千代版画展

—鳥的思考・虫的視点—

10／10（日）～11／7（日）

私の中で遊ぶ子どもの心

羽田智千代

"山村冬景譜"

「これは青具峠から見た景色ですか。」この版画を見てくれた何人もから聞かれたことばだ。

ところが、当の本人にとっては、これ程答えに窮する質問はない。

私の風景版画は特定の景色を写生したものではないからである。いわば、私が創った風景なのである。つまり私の心象風景である。私も時々あちこちに写生にも出掛けるし、写真にも収めて来る。でもそれは飽くまで絵を創るための資料でしかない。そうして集めた資料が、やがて私の中にイメージを拡げながら、組み合わされたり、新たに創り出されたりして、次第に私の風景として板面に姿を表し始める。更に幾多の紆余曲折を経て、漸くできあがる。できあがった風景は、その時の私が一番美しいと考え、こんな風景を観たいと願っているものだと信じている。

山村冬景譜

こうした絵創りは、直接目の前に対象があって、見て描く絵と比べて生みの苦しみは少々大きいように思う。できあがるまでは苦しみの連続でもある。でも、作者が楽しんで創ったものでなくては、見てくれる人をも楽しませることはできないと常々思っている。"絵を創る楽しみ"は、山登りのそれと同じではないかと密かに考えている。大方苦しみの方が多いが、尾根で眺望が開けた時、やがて頂上に立った時、歓気に心躍り、登りの苦しみは一気に忘れ、眺望のすばらしさに忽ち酔い痴れてしまう。それまでの苦しみが大きければ大きい程、その喜びは大きいように思う。

絵を創り出す時も、苦しんだ揚句に、自分の考えていた以上のイメージの絵ができた時の喜びは、山頂で見た眺望の美しさに抱く感動と比べても決して劣ることはない。

苦しみ、喜びの織り成す交響曲に酔う心地よさのようなものが、絵創りの楽しみだと思っている。

気に入った風景を創り出すことは苦しいけれども、わが心の赴くままに創作できる自由があって、楽しんで創れるし、展覧会などに出品しても同じような作品に出合うことは、滅多になく、この面でも快いものがある。

こんなにして創られた私の世界であり、これが私の風景版画である。

だから、「青具峠の景色ですね。」と言われれば、「そうですね。」と応じ、「小谷の風景ですね。」と聞かれれば、また「そうですね。」と曖昧に答えている。

自分でもおかしく思うこともあるが、敢えて説明することもないと思っている。

私は、以上のような版画創りを『山湖描心』と称している。

廃屋に惹かれて

十年程前、白馬村の西を南北に貫いている千国街道脇で、朽ち始めたくず屋の民家を見た。かつては、親・子・孫三世代、あるいは四世代の大所帯で暮らしていたであろう歴史のいっぱい詰まった立派な家である。悲嬉こもごも、心に焼きついている幾つかの思い出の刻まれた家が、間もなく跡形もなくこの地球上から消え失せていくであろうことに、たまらない淋しさを覚えた。そう思って改めてあちこちを歩いてみると、同じように崩れかけたものや、人気のないままにひっそりと建っている幾つものくず屋が目につく。その中の一軒を、美麻村の街道沿いに見つけ、その行く末を見届けることにした。二年半に亘って、二十数回通った。その時々に見る朽ちていく姿は、老いさらばえた人間の末路と重なって見え、もの言わぬだけに悲しく、やり切れなかった。スケッチする手が震え、カメラの焦点がぶれそうになることもあった。今思い出しても胸の痛みをおぼえる。今はそこに近代的な新しい家が建っている。どんな人が、どんな暮しをしているのだろうか。以前、そこに建っていたくず屋の歴史とどう繋がっているのだろうか。気になるところである。

そして、トキやニホンタンポポを初め多くの生物が絶滅の危機に瀕している事実にも、思いが拡がっていく。

こうした気遣いの中で生まれたのが、廃屋の『山居想刻』シリーズである。

前述のような、重く、やり切れぬ思いを如何に託すことができるのかを自らに問いつつ制作した。ある時は、明るい陽光と対比したり、ある時はどっしりとした蔵をかたわらに置いてみたり、ある時は夜の帳りの中に置いて、怪しげな雰囲気をと、考えたりした。わが思いが伝わったかどうか甚だ疑わしい。

『山居想刻』未だ道遠しの感が深い。そして、実景を基にした創作表現のむずかしさを思い知らされている。実景から離れられぬうちは、作者が自らの思いを託すどころか、逆に引きずり込まれ、作者自身が埋めつぶされてしまう結果になり兼ねないと感じている。

廃屋Ⅰ

"鳥人間"の誕生―めんめ、めんめ

わが家のイチイの生垣が、何年も手入れもされず伸び放題なのが気になっていた。我々が散髪した後の心地よさを思いながら、生垣の刈り込みをやった。切り落とされた太い枝を片付けようと手にとった瞬間、"お前だって自由に思う存分伸びたかったろうに…"と、もの悲しい気持ちにおそわれた。そう思ってみると、その太枝がワナワナと身を震わして、何かを訴えているように感じる。版木に墨筆で、この思いを直描きし、彫りかかった時に、孫娘が二階のアトリエに入って来た。二才ちょっとの、この孫娘は、目を輝かせて、「おじーちゃん、うんまく、ちゅくったね。めんめ、めんめ…。」と言いながら、やや変形し

て描いた作品"鎮魂歌"の切り木口の年輪を指さした。彼女が暫く賑やかに遊んで階下へ去って行った後、一人静かにこの彫り始めたばかりの作品を、じっと見つめていた。彼女の言った「めんめ、めんめ」は、私に重大なことを教えていることに気づいた。"年輪を目で表せば、樹の痛みを、もっと、もっと力強く、表情豊かに訴えることができるんだ"と―。

鎮魂歌Ⅰ

鳥人間の活動

折角、樹の痛みを表したいとの願いを込めて絵創りをしていたのに、年輪部分には不注意にも気持ちが行き届いていなかったのだ。

子どもの、とらわれない純粋な感性のすごさに、改めて感心させられた。

この作品がきっかけとなって、表情豊かな目の鳥人間の出番がまわって来ることになり、以後のテーマの語り手として活躍してくれることになった。

孫娘の一言から生まれた独特の目をもつ鳥人間は、身体全体で、特に豊かな表情の目で、私の心に溜まった種々の社会問題や環境問題への思いを、小気味よい調子で訴えてくれ、語ってくれている。おかげで、ストレスに押しつぶされることなく、張りのある毎日を過ごさせて貰っている。

"これはたまらん"。地下水を、自然の節理に背いて、工業用水として多量に汲み出した報いに、地盤沈下や傾斜が起こり、そこに住む人々の毎日の生活が大変な不便と危険に晒されている。自然をないがしろにすることがどんなに恐しいことであるかを、鳥人間はユーモアたっぷりに抗議してくれているように思う。

鳥人間に託した私の思いを果して理解して貰えるだろうかと不安を抱きながら、東京都美術館での第43回日本板画院展に出品した。

美術誌『月刊美術』は、'94年2月号（No.221・P.49）の記事"'93年版画界―主な出来事"の中で、「…ほほえましいユーモアたっぷりの木版画。こういう世界は版画のなかで、やはり忘れられてはならない。」と書いてくれ、又、美術評論家の佃堅輔氏には、「…多くの人に認めて貰うことは大変だが、そんなことに負けずに続けてほしい（要旨）…」と励まされた。

これはたまらん

意外の反響に驚かされたが、大いなる自信と力を得、今も鳥人間には大変活躍して貰い、世話になっている。

この鳥人間シリーズは、もう七年も続いているが、いっこうに飽きることがない。それどころか創るたびに鳥人間たちが見せてくれる活動のおもしろさは、私を大いに楽しませてくれる。愛嬌のある目をクリクリさせ、不恰好な身体をゆすりながら、「ミサイル発射なんてサ、みんなを不幸にするだけじゃないか…」とか、「何でこんなにゴミが流れてくるのサ、うまいこと言ったってサ、川がこんなにきたなくっちゃだめだよ」と訴えている姿は、可愛くもあり、痛快この上なく、飽きることはない。

今年、第49回日本板画院展にも、"そりゃあつぶされるさ"と、"上へまいります"の二点を出品した。前者は、現在の私の多忙な日常を訴えたい気持ちと、企業を経営している版画仲間の、「…帰宅は毎日午前二時頃…。版画を作る時間をどうしても見出せない…」と苦しそうに言う表情が、発想のきっかけになっている。考えてみれば、この事は決して特異なことではなく、現在至る所で、こんな無理な生活を強いられている事実に気付き、愕然とする。

又、後者は、政財界で、金儲けと出世のために、他人より、ちょっとでも優位に立とう、上に上ろうとするお偉方の何と多いことか。ある時、気がついてみたら、娑婆には既に彼等の戻る席はなく、路頭だか、空中だか知らぬが迷って、あたら人生を棒に振ってしまう。

上へまいります

やり切れぬのは大衆に大きな苦しみを与えていることである。全く腹立たしいことこの上無しである。

こんな思いが、果して表現されたのだろうか。

毎年、展覧会を見てくれているモダンアート会員のI氏が、「今年の作品は一層肩の力が抜けて、自由になり、ユーモアの中に主張があっておもしろかった」と感想を書き送ってくれている。

"上にまいります"について、美術誌『美術の窓』（No.191・8月号P.22）は、「…上に上っていくといいことがあるかどうかはわからないが、人々はとりあえず上ろうとしている。しかし実際に上に上っていってしまうと、それは死んでしまうのと一緒で星になるのかもしれない。ノンシャランな童話的な世界に見えて、実はその裏には苦い認識があって、それをこの黒一色のトーンでユーモラスに表現する力が興味深い。」と評してくれている。

作品の根っこにあるもの（つまりテーマ）を何とか汲み取って貰えたのだろうか。

はてな

子どもたちに教えられて

ある友人が、「お前、よく種切れにならないなあ」と気遣ってくれた。私自身も時々、よくぞ種切れにならぬものだ、と驚くことがある。でも、今のところどうやら種切れを起こさずに過ぎている。その秘密は、子どもたちとの関わりにあると思っている。

スケート靴の片方を、刃の方から描き出した七才の男の子。しっかりとした筆使いで、だんだんに靴の上の方へ描き進め、片方のスケート靴を描き上げたところで、「ブーッ」と一息入れ、安堵の様子。「スケート買って貰ったんだね」との問いかけに、「うん」。スケートを買って貰った喜びそのものがテーマで、この子の絵はここで出来上がったのだ。

私自身も、中学一年生の頃、編み上げの革靴を貰った喜びを片方の靴で表現し、出来ばえにいささか満足したことを思い出す。ところが、「片方ではまずい」といった意味の評価を貰い、どうして両方描かなくてはいけないのかと疑問に思ったことを、今も忘れない。今、この子の絵を思い出しながら、「片方だっていいんだよ」と、声を張り上げて言ってやりたい。

十才になる子どもたちと温泉へ行った時のことである。予めした注意も耳に入らず、喜び勇んで浴槽の深いところにとび込んだ男の子。あっさりと湯の中に頭まで沈んでしまい、漸くにして空中に顔を出し、浴槽の縁にしがみついた。"お湯の中で、背伸びした姿勢で浮かんで立ち上がったように描いた絵"の、手足や首の異様な長さに、この子のお湯の中での苦しさを察し、思わず強い感動をおぼえた。

にわとりと、さんざん遊んだ揚句、"舞い上がったにわとり"を描いた七才の女の子。「紙いっぱいに大きく描こう」との指導についていけず、彼女は画用紙を縦に使って上の方に、下2/3程の余白をとって、舞っているにわとりを描いた。この子は、にわとりが高く舞い上がるところなど見たことがなく、高々と、舞ったにわとりを見た時の驚きは、大変なものだったろう。つまり2/3の余白部分は、この子にとってテーマを表現する最も大切な部分だったのである。この子のすごい構成力に驚きもし、感心もした。若しも、他人がこの余白の部分は不要として切り取ったとしたら、子どもの空間をとらえたすばらしい表現は、その瞬間に抹殺され、いっぺんに信頼関係を失ってしまうだろう。身の毛のよだつような恐しさを感ずる。

二～三の子どものすばらしい実例を紹介したが、このような例は数え上げれば切りがない。

絵には本来、作者の心や考えが潜んでいるものと考える。その心や考えのしっかりと感じ取れるようなものが、本物であろうと思っている。

このような真の表現を見取るためには、絵面の見かけに騙されることなく、純真な子どもの心のように、空を翔ける鳥のような大きく、広い心を持つことが大切である。

子どもたちの真の表現の何とすばらしいことか。子どもたちの絵を描いたり、版画を創るところを間近かに見ていて、たくさんのアイデアや技法などをはじめいろいろな恵みに与っている。有り難いことである。

最近の作品創り

この頃、力んで、力んで創り上げた作品より、極く自然に、さらっと出来たものを、いとおしく思うようになった。それは、改良に改良を加え、大きく鮮やかに作り出した、造花のように無表情な鑑賞用植物よりも、路傍や樹蔭にひっそりと咲く、自然のままの、小さな草花の美しさに強く惹かれるためであろうか。それらの草花は、『雑草』という汚名を着せられて邪魔物扱いされ、常に草取りとか、草むしりと称する危険に晒されている。人間にこんな理不尽な仕打ちを受けながらも、たくましく、しかもそそとした可愛い花を咲かせ続けている。舗装道路のさけめなどに咲く草花には唯々驚きの目を見張るばかりである。

飾りたてない草花の自然のたくましい美しさに気付くには、小さな虫たちが、これらの草花と戯れ、語り合うような、又ぐっと近寄って虫めがねで、のぞき見るような、やさしく、繊細な感覚を磨いていかなくてはと思っている。

（日本板画院理事）

有明夜空

▼訂正とお詫び▲

第四四巻第八号四頁三段目の笹川氏と風見氏のお名前に誤りがありました。正しくは笹川速雄氏、風見武秀氏です。訂正するとともにお詫びいたします。

山と博物館　第44巻第9号
一九九九年九月二十五日発行
発行　〒398-0002 長野県大町市大字大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六―二二―〇二一一
FAX　〇二六―二二―二二三三
印刷　奥村印刷
定価　年額一、五〇〇円（送料共）（切手不要）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―一三一九三